

## 日本人のみた外国 ルールは自分に有利に変えるもの? (カルチャー・ショック)

著者	鈴木 有理佳
権利	Copyrights 日本貿易振興機構 (ジェトロ) アジア経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) <a href="http://www.ide.go.jp">http://www.ide.go.jp</a>
雑誌名	アジ研ワールド・トレンド
巻	141
ページ	46-46
発行年	2007-06
出版者	日本貿易振興機構アジア経済研究所
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2344/00005232">http://hdl.handle.net/2344/00005232</a>

# ルールは自分に有利に変えるもの？

鈴木有理佳

ルールはあるようで無いもの。特に途上国ならば何ら珍しくないことである。筆者もフィリピン滞在中に身をもって実感したが、そのなかでもフィリピン大学経済学部大学院での出来事を二つばかり紹介したい。

そこはさすがにアメリカ式だけあって、試験やリポートが多かった。試験は一教科につき大体二〜三時間で、もちろん決められた時間内に解答するというお決まりのものである。と想っていたが、必ずしもそうではなかった。予想以上に難しい問題のため生徒が悪戦苦闘していると、試験監督（大半は授業アシスタントの大学院生）が終了間際に「あと二〇分延長」などと言って突然伸びることがあるのだ。または生徒から申し出があつてそうなることもある。もちろん生徒は喜び、試験監督や当該科目の先生の人気も上がる。でもそんな時にすなおに喜べない学生がいる。そう、試験は時間内に解ける問題から取り組むものと、と刷り込まれている日本人の私だ。そもそも延長されることを念頭においていないため、文章を書き足す余白がすでになく、書き足せば読みにくくなるのは必然である。逆に調子よく問題が解けた時などは、成績上位をねらえるチャンス。なのに、延長されれば差がつかなくなるではないか。こうして

気がつけば二〇分延長のはずが三〇分に、三〇分が四〇分になり、一応厳粛なはずの試験がドラドラと続くことがあつた。

次はリポートに関して。授業中にリポートの課題と長さ、それに提出期限が発表される。ところがこの提出期限がくせ者で、知らない間に変更されていることがあるのだ。別に私が外国人だから知らなかったというわけではない。「授業時間外」に「一部の学生」と先生の間で決められてしまうのである。もちろん、その後の授業もしくは掲示板で周知されれば問題ない。しかし先生は忘れている場合が多く、掲示板は求人案内や集会の宣伝ばかりで有効に活用されない。親しい学生間、つまり仲間内のみならずだと、個々の学生がそれぞれ先生と交渉して提出期限を決めるため、気が付けば人数分の締切日が設定されていたなどということもあつた。かくいう私も郷に入れば郷に従えだ。まずは理由を並べて一週間ばかり延ばしてもらい、念のため私よりも後に提出する学生がいなか確認し、締切日を最後の学生に合わせて提出する…なんてこともした。案の定、先生は個々の締切日なんて覚えていなかった。

ルール（提出期限）が変更された事例である。それも一部のプレーヤー（学生）の都合に合わせてルールが変更されている。こうしたことが頻繁にあると、プレーヤーはルールを所与とした戦略的行動がとれなくなる。まあ、たかが大学での出来事と思ふかもしれないが、これが同国のいわゆるエリートを排出しているフィリピン大学で行われているという点に注目したい。現職のグロリア・マカパガル・アロヨ大統領はここで博士号を取得しているし、上の事例で紹介した先生の一人は次官経験者だ。卒業生には政・官・財界で活躍している人も多い。

ここで話の次元をいきなり国家レベルにしてみよう。一貫性のない経済政策、法律制定後の度重なる改定、はたまた一週間前になって突然大統領府より発表される祝日。投資家を悩ませている問題の一例だ。ルールが容易に変更され、ましてや変更後の利益が確実に大きいと見込まれる場合、利害関係者にとつての最善の戦略は「ルールを自分達に有利に変える」ことではないだろうか。フィリピン大学で切磋琢磨したおかげで（？）、こうしたニュースを目にする度になんだかとても実感が湧く。

（すずき ゆりか／アジア経済研究所地域研究センター）